



第501号
「がんばろう、日本!」
国民協議会
機関紙

発行所「がんばろう、日本!」
国民協議会

発行人 戸田政康
編集人 石津美知子
http://www.ganbarou-nippon.ne.jp
(東京事務所)
東京都千代田区九段北4-3-16
サンライン第14ビル6階 〒102-0073
TEL 03(5215)1330
FAX 03(5215)1333

(発行所)
東京都東大和市南街2-17-16
パピルス会館 〒207-0014
TEL 042(566)2950(代)
FAX 042(566)2949

民主主義の復元力の 〳〵 始まりの始まり 〳〵 新自由主義の 〳〵 終わりの始まり 〳〵 歴史的な転換点にするために

民主主義の危機から、
民主主義の復元力の
〳〵 始まりの始まり 〳〵

バイデン第46代米大統領の就任式は、「民主主義の大義の勝利を祝福する」(就任演説)ものとなった。大統領選の結果について根拠なく「不正」を訴え続けたトランプ前大統領の言動は、ついに支持者による議事堂襲撃にまで至った。議事堂に乱入した暴徒は、憲法に従ってバイデン氏の勝利を確定しようとするペンス前副大統領を「裏切者」「吊るせ」と罵ったが、ペンス氏は「世界の国々は、我々の民主主義の回復力と強靱さを目の当たりにするだろう」と、バイデン氏の勝利を確定した。トランプ政権の四年間は、「選挙によって民主主義が死んでいく」過程でもあった。その帰結ともいえるべき議事堂襲撃の後、アメリカの立憲主義と民主主義はなんとか首の皮一枚で生き延びたといえるだろう。

就任式で朗読されたアマンド・ゴーマンさんの詩は、次のように始まる。

「日が昇ると、私たちは自問する——どこに光を見いだせよう

か、この果てなき陰のなかに。私たちが引きずる喪失、歩いて渡らねばならない海。

私たちは果敢に、窮地に立ち向かった。

平穏が平和とは限らず、「正しさ」の規範や概念が正義とは限らないことを学んだ。

それでもその夜明けは、いつのまにか私たちのものだ。

なんとか私たちはやるのだ。なんとか私たちは切り抜け、目の当たりにしてきた——壊れてはいないが、ただ未完成の国を」(クリエジャポニ21
<https://courier.jp/news/archives/299528/>)。

民主主義は「勝利」や「正義」で語られるものではなく、「壊れてはいないが、未完成」なものであり、「制度化された不確実性」「紛争と協力の微妙な均衡」(「試される民主主義」ヤン・ウエルナー・ニミュラー)なのだ。民主主義は選挙を通じて死んでいくこともあるし、権威主義やファシズムとの間は「万里の長城」で隔てられているわけでもない。紛争と協力の微妙な均衡である民主主義を機能させるのは、ルール以前に社会に共有さ

れる規範とも言うべき「柔らかいガードレール」(レビツキー&ジブラット「民主主義の死に方」)であり、その復元力や自己修正力こそが民主主義の強さにはかならない。その源泉は、市民社会の自己統治の絶え間ない深化と、そこから生み出される新たな公論にある。

民主主義は、パンデミックによっても試されている。民主主義よりも権威主義のほうが事態を効率よくコントロールできていると見えることもある。例えば中国は「コロナに打ち勝った」と宣言し、主要国では唯一GD Pがフランスに転じている。一方台湾は、「民主主義を傷めずコロナ抑制に成功」している。(参照:唐鳳氏インタビュー 1/14 朝日)

中国、台湾ともに防疫対策に位置情報システムを活用しているが、これは治安維持のための監視システムともなりうる。公共空間における規制や統制が民主的・立憲主義的にコントロールされるのか、それとも恣意的あるいは強権的に運用されるのか。

前出のインタビューで唐鳳氏

は、デジタル技術を使うことによって、利害が異なる人々の間での議論を通じて共通の価値観を見出すことを目指すとしている。民主主義は、多様な「私たち」を創造する営みといえるだろう。その民主主義の復元力には、人々の間の紐帯——共通の価値観——、そのための社会関係資本を集積していくことが不可欠となる。

それを解体していく中で、新自由主義と全体主義、権威主義は「共鳴」している。

梶谷懐・神戸大学教授は、日本と中国で「共鳴」する新自由主義について、「端的に言えば、それまで人々がよりどころにしていた中間団体が解体された後に、いわば決して怪我をしないうように遊具や砂場が工夫されて配置された『安全な公園』を政府や大企業のエリートが設計し、そこで庶民がのびのび遊ぶような社会のイメージである」と指摘している(「日本再生」500号)。

「市民が議論して、法律を作って、社会を統治していく」というプロセスは、面倒くさいので、権威のある国家に委ねてしま

新自由主義の復元力に期待するが、それは民主主義の危機から始まる。民主主義の復元力は、市民社会の自己統治の絶え間ない深化と、そこから生み出される新たな公論にある。民主主義は、多様な「私たち」を創造する営みといえる。その民主主義の復元力には、人々の間の紐帯——共通の価値観——、そのための社会関係資本を集積していくことが不可欠となる。それを解体していく中で、新自由主義と全体主義、権威主義は「共鳴」している。梶谷懐・神戸大学教授は、日本と中国で「共鳴」する新自由主義について、「端的に言えば、それまで人々がよりどころにしていた中間団体が解体された後に、いわば決して怪我をしないうように遊具や砂場が工夫されて配置された『安全な公園』を政府や大企業のエリートが設計し、そこで庶民がのびのび遊ぶような社会のイメージである」と指摘している(「日本再生」500号)。「市民が議論して、法律を作って、社会を統治していく」というプロセスは、面倒くさいので、権威のある国家に委ねてしま

(発行所)
東京都東大和市南街2-17-16
パピルス会館 〒207-0014
TEL 042(566)2950(代)
FAX 042(566)2949
〈郵便振替〉00160-9-77459
「がんばろう、日本!」国民協議会
ゆうちょ銀行 019店 当座0077459

1部 300円
定期購読 半年2,000円
一年3,500円

今号の紙面

- 2-3面 コラム「灯照隅」ほか
- 3-5面 「スウェーデンの主権者教育」
鈴木賢志・明治大学教授に聞く
- 5-10面 関西政経セミナー
「持続可能なまちづくり」
川勝健志・京都府立大学教授
「大阪の自治体まちづくり」
田中誠太氏ほか
- 11-12面 中国・香港の人権の闘い
劉慈平氏に聞く

う。ただし、ビジネスや技術開
発は自由によらせてもらう。そ
ういう国家と市民との、ある種
の取引関係がある、と考えられ
るかもしれません。ただ、それ
によって人々は物質的に「幸福
」になるかもしれませんが、それ
が本当に「私たちの社会」にと
つての幸福なのか、ということ
は慎重に考えていかなければな
らないでしょう(前出)。

「効率」や「コストを重視する
新自由主義からみれば、民主主
義は手間のかかる面倒なプロセ
スということになる。「社会学
者ル・ゴフは、個人を丸裸にし
て不安感で覆い、不安定な地位
に追いやることで防衛的・受動
的な存在に押しとどめ、他人や
社会に対して振るわれる『悪』
に対する警戒心を解除し、結果
として悪に寛容な社会を作り出
すメカニズムを内包している点
で、ファシズムと新自由主義は
同質だとする」(吉田徹「アフ
ター・リベラル」講談社現代新
書)。

権力者が設計した「安全な公
園」に生存や生活を委ねること
で、「どこどこ」の安定」は得ら
れるかもしれないが、個人が他
者とのつながりを断ち切れ、
「今だけ、自分だけ」になれば、
社会は成り立たない。民主主義
の復元力を可能にする社会のあ
り方が問われている。

新自由主義と消費者民主主義の 終りの始まりへ

パンデミックは1980年代
からの新自由主義のグローバル
化の帰結として、持続不可能な

までの不平等の拡大をもたらし
ている。

国際NGOオックスファム
は、「不平等なウイルス」と題
した報告書で、「世界で最も
裕福な1000人は、新型コ
ロナウイルスによる損失をわ
ずか9か月以内に取り戻した
が、世界の最貧困層が損失から
回復するには10年以上かかる
可能性がある」と指摘。さら
に、コロナ禍の中で最も利益を
上げた32のグローバル企業の
過剰利得に一時的に課税すれ
ば、2020年に1040億ド
ル(約10兆8000億円)の税
収が得られた可能性がある」と試
算。これは中低所得国の就労者
全員に失業手当を支給し、児童
と高齢者の全員に経済的支援を
行える額だとしている。

先進国と途上国の格差だけで
はない。コロナ禍にもかかわらず
日経平均がバブル後の最高値
を更新する一方、炊き出しや生
活相談の場にはリーマンショッ
ク時には見られなかった情景が
広がっている。

「会場には中高年の男性の姿
に混じって、お子さん連れで来
た人や若者、外国人の姿も目立
っていた。話を聞くと、3人家
族の全員が食べ物の確保に苦労
をしており、各地の炊き出しを
はしごして食料を集めている、
という声もあった。

老若男女が食事を求めて列を
作る光景は、飢餓レベルの貧困
が広がり、私たちの社会の底が
完全に抜けてしまっていること
を意味していた。それは、これ
まで生活困窮者支援を27年間

続けてきた私も見ることがな
い光景だった」(稲葉剛 論座
1/26)

一言で言えば新自由主義改革
は、公的な資源の配分を市場に
任せざることを意味していた。本
来は市場の取引になじまないよ
うな財やサービス、例えば水や
農地、公衆衛生などを民営化し
たり、収益化したりした結果、
コロナ前でも公衆衛生の最前線
に立つ保健所は大幅に削減さ
れ、収益化・効率化が求められ
た医療現場はギリギリでやりく
りし、「いのちとくらし」を支
える現場の自治体は三分の一が
非正規職員(ハローワーク職員
が官製ワーキングプア)という
状況だった。その「底」が抜け
てしまったのだ。

コロナ禍が明らかにしたの
は、「いのちとくらし」にかか
わる領域を、市場ではなく社会
共通資本として「共同」で維持
管理する必要があること、その
ためには民主主義や自治による
合意形成・共同の政治的意思
が不可欠である、ということだ
ろう。

新自由主義は共同の政治的意
思をつくりだす営み「政治」を
面倒なものと忌避し、誰か(市
場、エリート、権力者)にお任
せすることが効率的で、消費の
当事者性さえ享受できればいい
という。今だけ、自分だけ」の
世間を蔓延させた。「政治的」
という言葉が何かするということ
うさんくさいことという意味に
とられ、「経済的」という言葉
が何かしらフランスの意味にとら
れる雰囲気は、例えばこ
ういうことだろう。

緊急事態宣言下で可決された
三次補正予算(3月までに使い
切る)は、総額19兆円のうち、
医療支援は4・3兆円、GO TO
を含む「コロナ後に向けた経済
政策」に11・6兆円、防災に3
・1兆円というもの。立憲や共
産はGO TO事業などを撤回し、

医療機関や生活困窮者への支援
を強めるよう予算の組み替えを
求めたが、与党に退けられた。
予算・税という最も公的な資
源の配分が、「いのちとくらし」
からほど遠いところにある。医
療現場が「救える命が救えない」
と悲鳴を上げているにもかかわらず、
国民の生命と生活を守る

べき政治が機能していない。た
だそれは「政治」という活動自体
を軽視し、今のリーダーがダメ
なら自分たちの候補を探しても
なく、ただ酒の肴に政治家を冷
笑する癖を身につけてしまっ
た、この社会の、多くのメンバ
ーの責任でもある(神里達博
朝日1/22)。

コロナ禍では、これまで政治
を政党・政治家間の権力闘争や
利権争いとして冷笑したり忌避
したりしていた人々にとって
も、政治が「いのちとくらし」
に直結するものになりつつあ
る。ただし、消費の当事者性だ
けを享受する「今だけ、自分だ
け」の延長では、利害の違いを
対立や敵対に転化するだけのシ
口モノになる。「他人との共通
性や紐帯が断ち切れ、個人が
自分のみ(あるいは自分の問題
のみ)に関心を集中させてしま
えば、他人の問題や不幸は、自
分との共通性を持たないかぎ
り、政治の対象とならない」(吉
田徹「アフター・リベラル」講
談社現代新書)。

「政治的中立」や「自己責任」
という他者との関係性や対話を
遮断する「呪いの言葉」や、自
己責任や自助、「既得権打破」
などの新自由主義のレトリック
は、三十年以上かけて社会のな
かに埋め込まれてきた。「いの
ちとくらし」を自分たちの手に
取り戻す「政治の復興」ととも
に、それを他者理解の糸口へ変
換することで、社会的連帯のた
めの社会関係資本をうみだして
いこう。